

教育研究の構想

1 一貫教育をめざすにあたって

今、教育が抱える今日的な課題として、基礎的・基本的な知識・技能の定着とそれを活用する能力が十分でないこと、学習意欲の低下、自己肯定感の低下等の問題があげられる。そして、子どもたちをとりまく社会は、次のように急激に変化している状況にある。

- 価値観の多様化（いろいろな考えを認めようとする社会になってきている反面、主張しなければ流されやすい社会ともいえる。）
- 高度情報化（日本中どこにいても同じ情報がほとんど同時期に入手できる社会になってきている。情報を読み取る力や情報を活用して伝える能力が求められるようになってきた。）
- 少子高齢化（若い世代が高齢者を支えていかなければならない時代である。）
- 国際化（日本だけでなく世界的な規模で物事を考えていかなければならない問題が増えてきてる。）

このような社会背景の中で、先行きが不透明で、課題の多い現代を生きている子どもたちの姿が浮かび上がる。だからこそ、私たち大人が適切な「社会生活」をイメージし、子どもたちの将来に向けて、今後の教育のあり方を真剣に考えなければならない。

私たち附属学校園は、一貫教育がスタートするまでは、それぞれの立場からめざすべき子ども像を設定し、その実現に向け教育課程を構想し、保育や授業を日々行ってきた。その営みを通して活動に積極的に取り組む姿勢や、見つけた課題を追求しようとする意欲をもった子どもたちの姿が見えてきている。また、仲間と共に生き生きと毎日を楽しく有意義に過ごしている子どもたちいる。しかし、その一方で、自分自身に自信がもてず、自己肯定感や自己有用感等が低下している子どもや、学習や生活に困り感を抱き純分な満足感を得られないままにくらしている子どももいる。

本学校園の子どもたちも、変化の激しい現代社会のあおりを受け、物質的には確かに豊かになったとはいえるかも知れないが、自分自身を大切に思う心や人間的なつながり、多様な価値観が右往左往する社会を生きぬく能力が十分ではないのではと危惧する。

以上のことをふまえて考えたとき、まず、社会の中で一人ひとりが生きぬくための礎として「確かな学力」の育成が大切であると考え。そして、よりよい社会をめざし、人が人とつながり、その実現に向けて力強く行動できる力である「社会力」の育成が重要であると考え。そのためには、子どもたち一人ひとりの成長をより大きな枠組みでとらえ、今まで以上に幼小中が連携していく必要があるし、そうすることが子どもたちの資質や能力をより効果的により継続して育成できると考える。

本学校園が幼小中一貫教育に取り組んでいる大きな理由の一つに、以上のようなことをあげることができる。「確かな学力」と「社会力」は、車の両輪のように、どちらかの力一方だけに偏ってしまうと十分に力が発揮されない。両者がバランスよく育っていくことが重要である。そして、それは、私たちがめざす豊かな学びをつくる子どもへとつながり、豊かな社会生活の創造を実現するものと考え。

○研究の年次計画 研究主題 「豊かな『社会生活』を創造する幼小中一貫教育の追究」

	研究副題	確かな学力の育成	社会力の育成
平成20年度 (一年次)	～子どもの学びをとらえる～ 豊かな学びをつくる子どもの姿の確定 ・子どもの育ちを教師の視点からと子ども自身のとらえとの両方からさぐる。	とらえた子どもの育ちをもとに、保育や授業を構想し、学力の育成と社会力の育成を図る。	
平成21年度 (二年次)	～子どもの学びをつなぐ～ ・思考力・判断力・表現力を子ども同士のかかわり合いを通して教科学習を中心に育成する。 ・社会力について、3つの研究領域〈保育・生活・総合〉〈道徳〉〈特別活動〉を中心に育成する。	思考力・判断力・表現力を整理する。 かかわり合いの中で育てる。	〈保育・生活・総合〉〈道徳〉〈特別活動〉の関連性 教育研究ブロックと研究領域をクロスさせて、教育研究ブロックごとの発達課題をさぐり、取り組みの構想に生かす。

平成22年度 (三年次)	～子どもの学びをつむぐ～ ・思考力・判断力・表現力を育てたり高めたりするための学び合いと教師のはたらきかけのあり方をさぐる。 ・〈保育・生活・総合〉と〈道徳〉、〈特別活動〉と〈道徳〉とのつながりを整理し、社会力の育成に向けた保育や授業を構想する。	思考力・判断力・表現力の11年間のつながりを整理する。 よりよい学び合う場面の構想と教師のはたらきかけをさぐる。	3つの研究領域のつながりを具体的な活動を通して整理し、明確化できるように、年間指導計画や具体的な活動を見直す。
平成23年度 (四年次)	～子どもの学びをひらく・いかす～ ・学んだことを活用し課題を解決したり、表現したりする。	思考力・判断力・表現力の活用を視野に入れた構想を練る。	実践を通して、子どもの育ちを検証する。

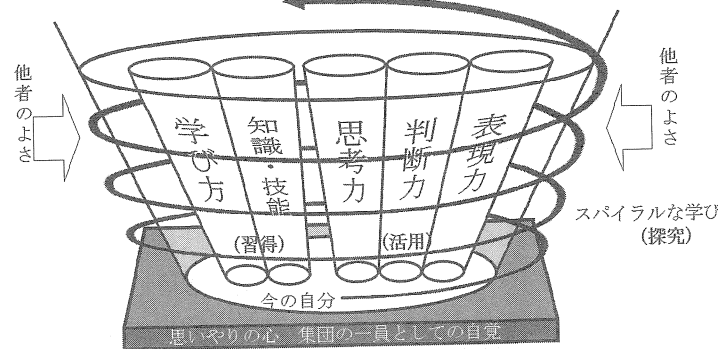
2 昨年度の研究

(1) 昨年度の研究主題

研究主題	豊かな「社会生活」を創造する幼小中一貫教育の追究 豊かな「学び」をつくる子どもの育成 ～子どもの「学び」をつなぐ～
------	--

一昨年度、豊かな「学び」をつくる子どもについては、思いやりをもって、集団の一員であることを自覚し、知識・技能、学び方を習得し、思考力・判断力・表現力を活用しながら、課題解決をめざしたり、もの見方や考え方を、自分自身への気づきをより獲得することを求めて、学び続けていく姿であると整理した。その姿は、右図1のようなイメージ図で表した。幼小中の一貫教育を進める上では、まず子どもの実態を把握することが重要であると考え、一昨年度「子どもの学びをとらえる」というサブテーマを設定した。そして、保育や授業の構想と展開で、子どもの思いや願いなどを教師がとらえ、それを保育や授業に生かしていくことによさについて各教科部でまとめることができた。

図1：豊かな学びをつくる子どものイメージ図
新しい自分（豊かなもの見方・考え方、新しい自分自身への気づきの獲得）



昨年度はサブテーマを「子どもの学びをつなぐ」とし、「確かな学力」の育成と「社会力」の育成という2つの具体的な取り組みを中心に子どもたちの11年間の育ちを整理した。「確かな学力」の育成と「社会力」の育成は、車の両輪のような関係であり、どちらかに偏ってしまえばうまく進まず、両者がバランスよく回転していかなければならないと考えている。しかしながら研究を進めるにあたっては、視点を焦点化する必要がある。そこで、「確かな学力」の育成では、思考力・判断力・表現力の育成に着目し、保育や教科を中心に整理することにした。保育や授業を実践する中で、その保育や教科で定めた思考力・判断力・表現力の育成について、子ども同士の「かかわり合い」を視点に、幼稚園から中学校を通して、大切にしたいことを明確にするとともに課題も見えてきたところである。また、「社会力」の育成をめざし〈保育・生活・総合〉〈道徳〉〈特別活動〉という3つの研究領域において、これまで取り組んできたことを見直し11年間の一貫教育での関連性と継続性のある取り組みにしていこうと試みた。そして、3つの研究領域ごとに育てていきたい力や重点項目などについて、それぞれの研究領域ごとに整理した。さらに、教育研究ブロックごとの視点から11年間を「つなぐ」ことを重点に据え整理した。これにより研究領域で育てようとしている「社会力」の継続性について取り組みの方向性が見えてきたが、3つの研究領域間における「社会力」の関連性という面ではまだ明らかにできていない部分もあった。

(2) 昨年度の研究から見えてきたこと

①「確かな学力」の育成（かかわり合いの中で思考力・判断力・表現力を育てる授業づくり）

保育や教科において育てたい思考力・判断力・表現力を明確にし、11年間を通して育てたい力との関連を図った。さらに教科によっては、教育研究ブロックごとの思考力・判断力・表現力の育ちについても整理することができた。保育や教科の取り組みから、保育や授業の中で感じとったことや得られた事実を既習の知識・技能と照らし合わせ、比較・分析するなどの思考過程を経て自分の考えをまとめ、それを言語的な活動を通して表現することが思考力・判断力・表現力を育てたり高めたりする上で有効であることがわかった。また、問題解決の過程において、子ども同士がかかわり合うことが思考力・判断力・表現力を育てたり高めたりする上で有効にはたらくことや、特に初等部前期においては、体験的な活動を取り入れることで、学習意欲を高めたり、話し合いの内容に具体性をもたせ子どもの理解を促進させることもわかってきた。課題解決の取り組みにおいて、解決に至るまでの見通しや方法、手順などを子どもがかかわり合う中で発見していくための手立てが必要であり、そのために、教師が工夫し、授業の中で提示したりはたらきかけたりすることが子どもの学ぶ意欲を導き出し、主体的に自信をもって取り組んでいく姿勢を育てていくことにつながることもわかってきた。また、その中で、授業の構想段階や授業場面における教師のはたらきかけのあり方にも着目する必要性があることが課題としてあがった。

②研究領域を中心とした取り組み

昨年度は〈保育・生活・総合〉〈道徳〉〈特別活動〉という3つの研究領域において、どのような集団で、どのような力が育っているかを教育研究ブロックごとに整理した。それを一覧表にまとめたのが次の表である。

【3つの研究領域で行っている実践からそれぞれで育てようとしていること】

	初等部前期	初等部後期	中等部	
育成したい「社会力」につながる力	仲間とともに活動する喜びを味わい、素直に満足感を感じながら活動する力	所属する集団の一員であると感じ、所属集団のなかで自己を生かし、行動する力	自分が集団や社会の一員であるという自覚のもと、みんなのくらしをよりよくするために考え、構想をもち、実現に向けて進んで行動する力	
保育・生活・総合	こだわり	興味・関心	自分のために、人のために	計画性、社会貢献
	人とのかかわり	家族、身近の方々	地域の方々、障害のあるの方々、観光客	学校の仲間、地域の様々な立場の方々
	仲間とのかかわり	目的に沿った仲間	わかり合いながら進む仲間	ともに課題を追求する仲間
	ふりかえり	できるようになった	みんなでやってよかった	自分のしたことに価値がある
道徳	〈重点目標〉健康や安全に気をつけ、規則正しい生活習慣を身につけさせる。	〈重点目標〉相手の立場を考えて思いやる心を育てる。	〈重点目標〉勤労の尊さや意義を理解し、奉仕の精神をもって公共の福祉と社会生活の向上、発展に貢献することができる。	
特別活動	責任感	責任感をもって行動できる力	責任力	
	創意工夫	実践力	実践力	
	連帯感・所属感 自尊感情	思いやり 仲間力	受容力	

〈保育・生活・総合〉では、「こだわり」と「かかわり」、「ふりかえり」を大切に活動を通して、11年間の育ちの中で育てられる「社会力」につながる力について教育研究ブロックごとに整理することができた。そこから見えてきたことは、11年間を見通したときに初等部前期の段階にある〈保育〉と〈生活科〉では、人とのかかわりにおいて「安心感」をもつことが重要なこと、初等部後期、中等部の〈総合的な学習の時間〉においては様々な「ひと・もの・こと」に出会い、視野や経験を広げることが重要なことだとわかってきた。

〈道徳〉では、11年間のつながりを意識した道徳教育のあり方をさぐるため、まず小中学校の全体計

画の見直しを行った。さらに幼稚園の保育の中で道徳的視野の芽生えについて考察し、各ブロックごとの道徳教育の重点目標の設定に反映させることができた。

〈特別活動〉では、本学園のこれまでの教育研究における特別活動でめざす資質や能力としての6つの力（イメージ力、実践力、創造力、責任力、受容力、仲間力）について、集団活動に視点をおき、11年間のつながりから再整理した。その中で「仲間力」と「受容力」に着目し、さらに11年間のつながりから集団活動のあり方についてさぐった。特に幼稚園から中学校まで共通する係活動にしばり、明らかになった力から附属学校園として大切にしたい活動や仲間との関わり、その中で育成すべき力を整理することができた。

3 本年度の研究

(1) 本年度の研究主題

〈研究の全体構想〉

【めざす子ども像】

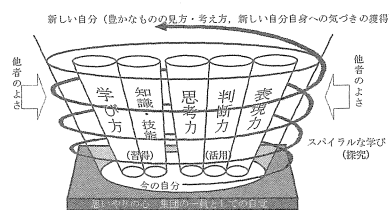
- ◇新しい時代を切り拓き、社会に貢献しようとする子ども
確かな知識を基盤とした優れた判断力・行動力を持ち、協働して豊かな社会の実現に果敢に挑戦しようとする。
- ◇豊かな感性を育み、創造的に探究し続ける子ども
人や事象の持つさまざまな価値や本質をイメージ豊かにとらえ、知的好奇心を持って学び、探究し続けていこうとする。
- ◇人とのかかわりを大切に、共に伸びていく子ども
自他のよさと可能性を尊重し、支え励まし合いながら、よりよい人間関係と自己の伸長を図っていこうとする。

研究主題

豊かな「社会生活」を創造する幼小中一貫教育の追究
豊かな「学び」をつくる子どもの育成 ～子どもの学びをつむぐ～

【豊かな「学び」をつくる子どもの姿のイメージ】

思いやりをもって、集団の一員であることを自覚し、知識・技能、学び方を習得し、思考力・判断力・表現力を活用しながら、課題解決をめざして、ものの見方や考え、自分自身への気づきをより獲得することを求めて、学び続けていく姿



学び合いの中での思考力・判断力・表現力の育成

- ①保育・教科でとらえた思考力・判断力・表現力について、11年間のつながりを整理
- ②学級全体で学び合う中で、思考力・判断力・表現力を育てたり高めたりするための保育や授業の構想とそこでの教師のはたらきかけのあり方

社会力の育成

昨年度整理したことを実践を意識して、3つの研究領域を関連づけながらより深く、明確にしていく。

〈研究のねらい〉

先述した昨年度までの取り組みをふまえ、今年度は、個と個の学びの「つながり」、時系列における個内での学びの「つながり」、個と学びの対象との「つながり」など、さまざまな「つながり」をより強固なものにしようと考えた。そこで、思考力・判断力・表現力の育成では、有効に子どもたちに活かすために、教師がどのようにはたらきかけていけばよいのか、そのあり方をさぐり明らかにしていくことに視点をあてる。また、「社会力」の育成では、研究領域を関連づけ整理することに重点をおく。

昨年度は、保育・教科の中での全体的な「つながり」や研究領域ごとに教育研究ブロックの「つなが

り」に重点を置き、研究を進めた。今年度は、「確かな学力」の育成に関わって、初等部前期、初等部後期、中等部ごとの思考力・判断力・表現力を保育・教科部で明確にすることで、より具体的なものとし、しっかりと、深くつないでいこうと考える。また、子どもたちのかかわり合いを通して、子ども一人ひとりの考えがつながり、広がったり、深まったりすることも昨年度の実践から明らかになった。そこで、今年度は、子どもたち一人ひとりの考えを確かにつなげ、子どもたちの「学び合い」をつくりだしていきたいと考える。

一方、「社会力」の育成に関わっても、昨年度研究領域ごとに整理したことを、今年度はそれぞれの領域をより関連づけることをねらいにおき、領域間のつながりを明らかにし、保育や授業の構想を立てる。

このように、今年度は昨年度の実践でつないだものを、より広くより深く、より関連づけながらつないでいくことを「つむぐ」と定義づけ、～子どもの学びをつむぐ～という副主題を掲げ、よりしっかりと一貫教育を進めていこうと考える。

(2) 取り組みの実践

① 思考力・判断力・表現力の育成 ～保育や教科を中心とした取り組み～

(i) 附属学校園全体で育てたい思考力・判断力・表現力を明らかにするとともに、それを保育や教科において教育研究ブロックごとに整理し、11年間のつながりを明らかにする。

思考力・判断力・表現力という3つの力については、早稲田大学教授の安彦忠彦氏が、「平成元年以来めざすべきものとして重視されてきたものであり、今までにも一つ一つが独立したものとして示されたことはない」ことを指摘している。本学園でも、これら3つの力は、お互いに影響し合い、補完し合って伸長するものだと考えている。

昨年度は保育や教科において思考力・判断力・表現力をどのようにとらえるかを検討し、そこで育てたい力との関連を図りながら11年間のつながりを考えてきた。しかし、11年間のつながりを考えようとしたときに、保育や教科ごとの特質から、考えられた思考力・判断力・表現力に偏りが見られ、11年間を教育研究ブロックの視点から見たときに関連性が分かりにくかった。そこで、附属学校園全体でとらえる思考力・判断力・表現力を定めようと考え、教育研究ブロックごとに、思考力・判断力・表現力に関わってその特徴を次のように整理した。

〈初等部前期〉

幼年期の子どもはすべてが学習の場であり、子どもたちは五感を使って、直接その場で感じとったり、体を動かすことで自分の中にある気持ちや願いなどを表したりしている。この時期の発達段階においては、いろいろな環境（自然・物・人）と関わり、さまざまな体験をする中で五感を駆使して豊かに感じること自体が思考力・判断力を活用している姿ととらえられる。そこでは、体験の中で感じ、考え、同時に自分なりの言動で自分の気持ちや願いを表したり判断したりしながら、他者とつながり、自分の気持ちを確かめている。

また、初等部前期は家族から学級集団、学年集団へと徐々に集団の規模が変化していく中で、自分と先生、自分と友だちという1対1の関係から1対多の関係へと人間関係の範囲を広げつつ、集団の一員としての行動の仕方、他者への共感や理解、思いやりや道徳性を徐々に身につけ、友だちとの人間関係づくりの基礎を培っていく時期といえる。

したがって、この時期は、自分の願い、思い、考えをしっかりとつとめ、そしてそれらを表現し合い伝え合い、他者の思いや考えを受け止めることが重要な課題である。

〈初等部後期〉

この時期の子どもは具体的な思考から抽象的な思考が徐々にできるようになり、少しずつ自分自身を客観的にみる力がついてくる。子どもたちは過去の経験や知識と比較したり、他者の考えと自分の考えを比較したりしながら、自分の考えを広げたり、深めたりすることができるようになる。

一方この時期の子どもたちは、友だち同士という小集団の人間関係を基盤としながら、学級全体、学

年全体、学校全体を意識し、活動も広がりをもつ。友だちとの関係において、思考力・判断力を活用し課題を解決していこうとする時期といえる。

したがってこの時期は、自分と他者の考えの違いを理解した上で、集団の中における自分の立ち場を意識し、自分の思いや考えを他者に理解してもらえよう伝えることが重要な課題である。

<中等部>

この時期の子どものくらしは、課外活動や児童会・生徒会活動など活動の場が多様化してくる。その中で自分の得意な分野で力を発揮したり、集団活動の一部の役割を担ったりする。抽象的な思考も深くできるようになり、集めた情報を分析し、課題を解決するための方法を考えたり、情報を総合的に見て最適な方法を見出したりできる力が備わってくる。学び合う集団の規模や質も多種多様になり複雑になってくる。そのような場面では、めあてがあり、それに向かって思考・判断するだけでなく、自ら課題を見つけ、その課題に向かって最適ではなくても、より適切な考えを導き出したりすることの方が多くなってくる。

この時期においては、課題を解決するために意見を出し合うだけでなく、集団が担っている目的を理解し、それを実際の行動に移し、集団としてお互いに評価・改善へと向かうことができることが課題になる。

以上のことを踏まえ、附属学校園全体でとらえる思考力・判断力・表現力を次のように定めた。

初等部前期 (4歳～小2)	遊びや生活の中で体験しながら、自分の願い、思い、考えを確かにもったり、それを表したりする力。
初等部後期 (小3～小5)	学習や経験の中で学んだことや感じとったことから、自分の思いや考えをもち、他者の考えと比べたり、他者の考えを取り入れたりして、その思いや考えを相手を意識して表したりする力。
中等部 (小6～中3)	習得した知識・技能や経験の中で感じとったことから、分析的な見方や総合的な見方を駆使し、自分の思いや考えをつくったり、集団を意識して発信したり実践したりする力。

なお、上記を設定する際には、次のようなことを考慮しながら作成した。

- 3つの教育研究ブロックで発達段階のつながりがみえるような表現にする
- 思考力・判断力・表現力について独立したものにせず、それぞれがつながった表現にする
- すべての教科を意識した表現にする
- それぞれの教育研究ブロックの最高学年の姿を意識した表現にする

これをもとに、保育や教科部会において教育研究ブロックごとに思考力・判断力・表現力を整理し、そのつながりを明らかにしていく。

(ii) 保育や教科ごとに整理した思考力・判断力・表現力を育てるために、子どもたちの学び合いをどのように構想し、教師がどのようなはたらきかけを大切にしたらよいかを、保育や授業を通して明らかにする。

昨年度までの取り組みにおいて、学級全体やグループやペアなど、子どもたちがかかわり合いながら活動することは、思考力・判断力・表現力の育成に有効であることが明らかになってきた。今年度は、子どもたちがかかわり合いを通して、子どもたち一人ひとりの考えがつながり、より広がったり、深まったりすることが大切だと考えた。これを「学び合い」とし、その場面をどのように構想し、その中で教師がどのようにはたらきかけていくとよいのかを、保育や授業を通して検証していこうと考えている。一人ひとりの考えが、より広がったり、より深まったりすることは、隣同士やグループなどでのかかわり合いでも行われるかもしれないが、意図的に子どもの考えをつなぎ、よりよく育てたり広げたり深めたりする場面では、学級全ての子どもが、そのステージにあがっているべきである。そこで、今年度は、学級全体の学び合いをどのように構想し、その中で教師がどのようにはたらきかけていくとよいのかを、保育や授業を通して検証していく。

子どもたちが学び合う場面では、子ども同士にまかせているだけでは、思考や表現がよりよく高まってはかない。子どもたちに多角的に視点を広げさせたり、より深く考えさせたりしたいと考えたときに教師が行うはたらきかけにはどのようなものがあるのかをさぐり、明らかにしていきたい。さらに、保育や教科で共通するものや特異なものを見つけていくことによって、保育や授業づくりの質を高めていくことができると考える。

「学び合い」を成立させるためにははたらきかけには、次のようなものがあると考えている。ただし、具体的には、保育や教科の特質も考えて、保育や各教科で考える「保育の構想」や「教科の構想」の記述で明らかにしていきたい。

○一人の子どもに対して行うはたらきかけが全体の学びへとつながるもの

その子のよさを受け止める	[認める, ほめる, うなづく]
その子自身に考えさせる	[待つ, 見守る]
その子の内面に気づかせる, 考えを整理する, 背景を引き出す	[さぐる, 問い返す, 掘り起こす]
その子にない新たな考えに気付かせる	[提示(提案)する]
その子の考えに対し, 教育的な観点から方向づける	[価値づける]
その子が自分で考えを導き出す時間を保障する	[待つ, 見守る]

○個と個の思いや考えをつむぐはたらきかけ

○個と個の思いや考えを対比させ, 共通な部分や違いを明らかにする
○個の思いや考えがどこから生じたのかを明確にし, 他者が理解するのを助ける

また、以上の研究を推進するために、本学校園では以下のような保育・教科部会を設けている。

- 保育部会
- 国語科部会
- 社会科部会
- 算数・数学科部会
- 理科部会
- 外国語活動・英語科部会
- 音楽科部会
- 体育・保健体育科部会
- 図画工作・美術科部会
- 技術・家庭科部会

保育は、すべての教科へとつながっていく素地が育まれる段階ととらえ、本学校園では保育部会として、その研究を進めることにした。

②社会力の育成 ～研究領域を中心とした取り組み～

本学校園では、豊かな「学び」をつくる子どもを育成する上で必要な力は「確かな学力」とともに「社会力」であると考えている。「社会力」とは、筑波大学名誉教授の門脇厚司氏が指摘している「自分が将来身を置くであろう社会において、人が人とながり、よりよい社会を築いていこうとする力」である。「社会力」には、社会の運営に積極的に関わっていく力、よりよい社会をつくっていこうとする意志・意欲、そのような社会を考える構想力、実際にその考えを実現・実行する資質能力などが含まれる。

「社会力」の育成を考えたときに、人と関わる力はもちろんであるが、人と関わるためには、媒介となる社会(もの・こと)との関わりを切り離して考えることはできない。また、人との関わりを通して変容していく自分との関わりもまた、切り離して考えることができない。「社会力」は決して研究領域のみで育てられる力ではなく、保育や各教科の中においても育てられる力である。また、大きくとらえれば教育活動全体を通じて育てられる力である。ただ、幼小中一貫教育の中において、「社会力」をどのように育てていくのかということについて、より明確にしていくためには、3つの研究領域に視点をあて、集団活動を手がかりに教育研究ブロックごとに育てていきたい「社会力」につながる力の整理をすべきだと考えた。そこで次の表のように、教育研究ブロックごとにその力を定めた。

	教育研究ブロックごとに育てたい力
初等部前期	仲間とともに活動する喜びを味わい、素直に満足感を感じながら活動する力
初等部後期	所属する集団の一員であることを感じ、所属集団の中で自己を生かし、行動する力
中等部	自分が集団や社会の一員であるという自覚のもと、みんなのくらしをよりよくするために考え、構想をもち、実現に向けて進んで行動する力

これをもとに、研究領域を中心に育てたい「社会力」につながる力や姿などを整理してきた。そしてこれまでに、〈保育・生活・総合〉が整理した育成したい追求の力、〈特別活動〉が整理した6つの力と、〈道徳〉の重点目標を教育研究ブロックごとに、「社会力」の育成に関わって重点的に指導する目標を見出し、それを育成するためのよりよい取り組みのあり方をさぐってきた。

今年度は、さらにこれらの取り組みからわかってきたことをもう一度見直し、研究領域をつなぎ合わせ、そして来年度、実践する中で検証していこうと考えている。そのために、今年度も道徳部会、特別活動部会、保育・生活・総合部会という3つの部会を設ける。教員は、保育・教科部会と兼ねながら研究領域の研究に取り組む。

まず、道徳部会では、昨年度の重点目標を見直すとともに、作成した年間指導計画を、その重点目標に照らし合わせて分類し、実際の道徳の授業でのねらいを明確にしていく。保育・生活・総合部会と特別活動部会では、「社会力」に関わりの深い活動は何かという視点でもう一度具体的な活動を見直し、そこにおけるそれぞれの力や姿を整理し直すとともに、〈道徳〉で育てる心情と関連づけて活動内容を明らかにしていく。そこで、昨年度の研究の成果から、今年度研究領域で育てたい力を整理するとともに、〈道徳〉で育つ心情が〈保育・生活・総合〉で育てたい力や姿や〈特別活動〉で育てたい力とどのように関わっているのかを整理する年と位置づけた。

次の表は、昨年度整理した〈道徳〉での重点目標や〈特別活動〉での育てたい力や気持ち、また〈保育・生活・総合〉での育てたい姿・力から今年度の研究の取り組みの見通しを簡単にまとめたものである。この表をもとに研究を進める中で、「社会力」の育成をめざしていこうと考えている。

		研究領域ごとに育てたい力		
		初等部前期	初等部後期	中等部
道徳		重点目標		
		健康や安全に気をつけ、規則正しい生活習慣を身につける。	相手の立場を考えて思いやる心を養う。	勤労の尊さや意義を理解し、奉仕の精神をもって、公共の福祉と社会生活の向上、発展に貢献することができる。
今年度の研究		年間指導（活動）計画を作成し、重点目標に照らし合わせ分類する。		
特別活動		育てたい力や気持ち		
		責任感、創意工夫、連帯感、所属感	責任を持って行動する力、イメージ力、創造力、思いやり	責任力、実践力、受容力、仲間力
今年度の研究		特別活動で育てたい力をよりよく育てるために、各教育研究ブロックごとに「社会力」に関わりの深い活動を見直し、道徳で育てる心情と関係づけて、保育や授業の実践を見つめて、その具体的な活動内容を明確にする。		
	具体的活動例	わいわいランド	林間学校、臨海学校	委員会活動、児童会活動 生徒会活動
保育・生活・総合		育てたい姿・力（「こだわり」から）		
		興味・関心	自分のために、人のために	計画性、社会貢献
今年度の研究		保育・生活・総合で育てたい力や姿をよりよく育てるために、各教育研究ブロックごとに「社会力」に関わりの深い活動を見直し、道徳で育てる心情と関係づけて、保育や授業の実践を見つめて、その具体的な活動内容を明確にする。		
	具体的活動例	友だちとともに、町たんけん	障害のある方々との交流 5年「子どものお店」	職場体験、社会貢献活動

「社会力」は、豊かな「学び」をつくる子どもを育成する上で必要な力であり、その力を育成させていくことは、「思いやりをもって、集団の一員であることを自覚した」姿を育成することにつながっていくと考えている。（文責 仙田 淳一）

- 【参考・引用文献】
- ・「中央教育審議会答申」（文部科学省，2008年1月）
 - ・「教育研究」（財団法人初等教育研究会編，不昧堂出版，2008年8月）
 - ・「社会力がよく分かる本」（門脇厚司，学事出版，2005年11月）